

# 「我が人生思い残すことなし」(前編)

きたごう はると  
作：北郷 遥斗

※ 前回までのあらすじ ―― 神戸大空襲の後、母きみは昭男以外の弟妹を連れ、自分の里である広島市郊外の実家に疎開した。父治一はその前からすでに家を出ていたが、ある夜突然、昭男一人が残っていた神戸の家に顔を出した。そして昭男に、一緒に奈良に行こうと説得したが拒絶され、一人また闇の中へ去って行った。――

(尚、ホームページでもこれまでのストーリーを見る事が出来ます。 [www.kyodo-keiei.co.jp](http://www.kyodo-keiei.co.jp))

## 8. 原爆

広島その日は朝からうだる様な暑さで、すでに7時を回る頃、夜明け前から畑の仕事に出いたきみと、実家の親兄弟はもう全身汗びっしょりになっていた。「ちょっとこらへんでひと休みするかのう。」きみの母タケが皆んなに声を掛けた。「きみ、まだわしらは帰られんけん、いっぺん戻って見て来てやったらどうかのう。」タケは朝出る時には、まだ寝ていた小さい孫達



を気遣って声を掛けた。「大丈夫や、芋をふかしといたさかい、高子が食べさせとるよ。」きみがいない時には、高子が他の子の面倒を見ることになっていた。「それに、今日は軍事教練の日やよって、みんなもう家出とるわ。」「そうか、心配なければいいんじゃ。」タケは納得した様子だった。と、突然、

「なんじゃ、街の方でサイレンの音しとらんか？」急に誰かが話した。「ほんまじゃ、あれは、警戒警報か?」「それにしても、飛行機見えるかのう?」皆んなが立ち上がって山合いから広島の方を覗き込んだ。「いいや、何も見えん。」「何かの間違いやったんかのう。」「ま、どっちにしてもここまでは爆弾飛んでこんやろ。」「ここには、何もなければ安心じゃ。」「狙われとるとしたら、宇品の飛行場じゃろ。」「あそこは、まだ残とるけんね。」「呉に来た時は、軍艦なんも残とらんかったけん、アメリカさんがっかりだったらしいよ。」「そいじゃけん、街に一杯爆弾落としていきよったんじゃ。」「もうこの戦争は、めちゃくちゃなもんになっとる。」皆んな口々に話をしていてその時。

街の方が猛烈に明るくなり、太陽が墜落でもしたかと思ったら、次の瞬間凄まじい爆音と激震が襲った。「地震だあ!山が崩れるぞ!一斉に皆、近くを流れる用水路に身をかがめ、頭を水に浸けた。どれくらい経ただろうか、震れが治まり、川の外に頭を出した。「一体どうなったんじゃ。」「見て!あそこ、あんな雲が・・・。」きみが街の方を指差し、呆然と立ちすくんだ。「なんじゃあれは、入道雲か?竜巻か?」それはまぎれ



もない、原爆の「キノコ雲」だった。「雲が広がっていく。広島の方が見えなくなっていく。」「真っ暗じゃ。」「どないなってしもたんじゃ。」「きみ!高子達は?」タケが大声を出した。「どないしよう。とにかく早くうちへ戻ろう。」「今度は何じゃ、雨か。」一人が空を見上げ、「墨じゃ、その雨。真っ黒じゃ。」「もうこの世の終わりなんかのう。」黒い雨に打たれながら皆んなは、家路を急いで走った。

(つづく)